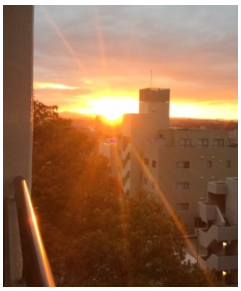
2016年を振り返る

大晦日に綴る。昨年に続き、政治の劣化や強権政治が目にあまる1年であった。7月10日の参院選により、衆参両院で与党が3分の2の議席を占めることに。改憲が現実味を帯びるようになり、戦後政治の転換点となる年になった。「7・11 ショック」だ。年末国会にみられるように、強権政治により悪法がたいした議論もなく成立してしまう。内田樹さんが言うように、こんなことでは立憲民主主義は壊死してしまう。

こんな悪政が続くのに、自民党や内閣支持率は高止まりだ。確かに、「目くらまし」のように、次々と「政策」なるものを繰り出し、外交に力を入れて「点数」稼ぎをしている。最大野党の民進党はどうも方向性が定まらない。こうした状況を反映した、安倍政権への消極的「支持」なのだろうか。それだけではない。やはりメディアの責任が大きい。権力を監視する役割を忘れ、ひたすら安倍政権にすり寄る大手メディアが目立つ。安倍政権のメディア戦略は、「自主規制」という名のもとに確実に浸透してきている。『ジャーナリスト』「月間マスコミ評」に寄稿して10年になるが、メディアについての検証・評価に今後も力を入れていきたい。

アベ政治・沖縄・原発・嘘と暴言など、腹の立つことが多い1年だったが、すこしは嬉しいこともあった。何と言っても、宮本憲一先生が日本学士院賞を受賞されたことだ。大著『戦後日本公害史論』をはじめ、長年にわたる先生の研究成果が広く認められた。受賞記念のお祝いの会 、先生の講演会などに参加して、あらためて刺激と「元気」をもらった。京都で2回開催されたお祝いの会には、水田洋先生と道中をともにした。97 歳になられた水田先生から、「ある精神の軌跡」や研究についてお話を伺うことができた。水田先生とは、名古屋大の中央図書館でいくどかお会いし、先生の研究への情熱に感銘したものである。



4月から「障害者差別解消法」が施行されたが、7月には相模原の障害者施設で痛ましい殺傷事件が起こり衝撃をうけた。遅まきながら障害者問題に関心をもち、レポートに何回か書き、「はるよこい」誌にも寄稿してきた。12月3日には名古屋市立大「さくら講堂」で、映画「みんなの学校」上映会&シンポジウムを市立大人文社会学部などと共催して開催した。「集い」の実行委員、コーディネーターをつとめたことは忘れがたい。

10月に亡くなった旧友・阪牧吉次は、『塵芥抄』という2冊の本を遺した。これは彼の「遺言」だと思う。本の副題に五木寛之さんの「林住期」という言葉を使っている。「林住期」とは、職場をリタイアしてからの人生ことで、最も自己を豊かにすることができる時期であると。そんな「林住期」を阪牧の分まで、大切にして生きていきたい。

なお、写真は年賀状にも掲載した自宅ベランダから撮った朝焼け。光が届くように。

(2017年1月1日)